

＜自分の持っている物を差し出した少年のように＞ ～神さまの願い～

(マタイ 14・13 - 21、マルコ 6・30-44、ルカ 9・10 - 17、ヨハネ 6・1-13)

先日、幼稚園にある七夕飾りを拝見させていただきました。子どもたちの持つ純粋な願いが叶いますようにと心の中で祈りながら。ご家族、取り巻く環境に支えられ、子どもたちが心身ともに成長していくなかで将来の姿を具体的に描いていくことができますように。

さて、これまで皆さんは「神さまにはどんな願い事があるのだろうか」などと考えたことはあるでしょうか？実は、聖書に基づくと「全知万能の神さまなのだから願い事はない」ということは言えないのです。なぜなら、神さまはわたしたちを「ご自分にかたどって造った」(創世記1・27参照)方なので、わたしたちが自由に将来の姿を思い描き、そうなるように生き方を選びながら過ごせるとしたら、当然、その自由は神さまご自身にも当てはまるからです。わたしたちの自由は、創造された神さまから頂いたものなので、当然、神さまにもわたしたちに願いを託す自由があるということなのです。では、神さまの願いとは何なのでしょう。

今回はすべての福音書に登場する、いわゆる「五つのパンと二匹の魚」の話を紹介します。一人の少年の差し出した「五つのパンと二匹の魚」が、イエス様の話を聞きに来ていたおよそ5000人もの人々に振る舞われる様子が描かれています。少年が登場するのはヨハネによる福音書ですが、“少しの物であっても周りのために捧げようとしてくれた決意と行動に感謝し、すべての人に自分の思いを振る舞いたい”。これが神さまの願いであり、まさにこの一人の少年の決意と行動はその願いを叶えるものだったのです。

神さまは願い事を捧げてくれることを心から喜ばれるし、将来の姿を思い描き、成長しながら歩んでいく人生を心から応援して下さいますが、神さまもわたしたちにご自分の願いを聞いて応援して欲しいという思いを持っていらっしゃるのです。

**ヨハネによる福音書(6・1-13)からの考察。※福音書の本文はここには掲載しておりません。**

・多くの方がイエス様の話を聞きにやって来ますが、それは「しるしを見た」からとあります。何のしるしかというと、それは5章3節～9節に書かれていますが、足の不自由な人、目の見えない人などを癒し、そして38年も病気に苦しんでいる人を立ち上がらせたというものでした。「38年も」とあるので、病気からの回復が見込めないほどの絶望的な状態であったことが伝わってきます。その人たちにとっては当然のことですが、目撃した周囲の人々にとっても衝撃的な出来事だったはずで、この奇跡を目の当たりにした人々が大勢、イエス様のあとからついてきたのです。他の三つの福音書(マタイ、マルコ、ルカ)では、イエス様がその人々の中にも話を聞いたり癒しを求める人々がいたりしたので、夕刻になる頃まで教えながら癒し続ける場面が書かれています。

・ヨハネによる福音書では意識的に4節で「過越祭が近づいていた」と紹介し、イエス様の最後の晩餐の記念、つまり<ミサ>と関連させています（イエス様と弟子たちとの最後の晩餐は、この過越祭の時に行われました）。そして、フィリポという弟子に「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と問います。これは食事の準備をどうするかについて弟子たちに尋ねていることに他ならないのですが、同時に「あなたたちならわたしの願いを受けとめて、それに応えてくれるはずだ」という思いを伝えていることになります。

・フィリポは「200 デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と答えます（「デナリオン」とは当時のローマ帝国の銀貨で、「1 デナリオン」が一日の賃金に相当します）。「およそ5000人であった」とあるので、200 デナリオン分のパンがあったとしても足りるはずはありません。弟子たちの頭の中にあっただのは、イエス様の願いに応えることではなく、ただ単純に“あなたの願っていることは実現できないでしょう”という思いだけでした。だからこそ、一人の少年の決意の伴った行動を「何の役にも立たない」と断言してしまうのです（9節）。

・五つのパンと二匹の魚を差し出した少年の思いはどのようなものだったのでしょうか。確かに自分の持っている分だけでは足りないことは明白ですが、それでも彼がそれを差し出したのは、自分に向けられている願いというものを理解していたからです。足りないことは分かっているけれど、少しでもあってもきっとイエス様は大きなものにして下さる、イエス様はわたしたちに手伝って欲しいと願っているはずだと信じて、その思いに応えるために自分のものを差し出したのです。この行為はおかしなことでしょうか。「何の役にも立たない」と断言して神さまの願いに応えようとしなないことの方がおかしなことだと思いませんか。自分の持っているものを差し出すという姿は、イエス様にとって感激するほどのものだったに違いありません。イエス様も自分の持っているものを捧げるためにこれからエルサレムに向かおうとされていたからです（エルサレムにおいて捕縛され、十字架上で命を捧げました）。

・イエス様はこの少年が差し出したものを大事に受け取り、感謝を捧げ、すべての人に配り、魚も同じようにします（11節）。すると、足りないどころか「残ったパンの屑で十二の籠（※）がいっぱいに」なります（12節）。（※）「十二」という数字は聖書において“完全さ”を表す表現なので、5000人ほどの人々が“完全に満たされた状態”になったことを示しています。

★ヨハネによる福音書では、このパンと魚の増加の話はイエス様によって奇跡が起きたということだけをただ伝えるのではなく、神さまがわたしたちに、イエス様をとおして自分の願いを聞いて手伝って欲しい、この少年のように、そのために決意して行動して欲しいという思いが込められた内容なのです。そして、このことが「ミサ」において思い起こされているのです。わたしたちの願いとともに神さまの願いが交わるものこそ「ミサ」なのです。

★神さまの願いを叶えるため、わたしたちがこの少年のようになることができますように。この少年のような心で自分の持っているものを捧げ、神さまがそれをすべての人を満たすほどのものにして下さいますように。